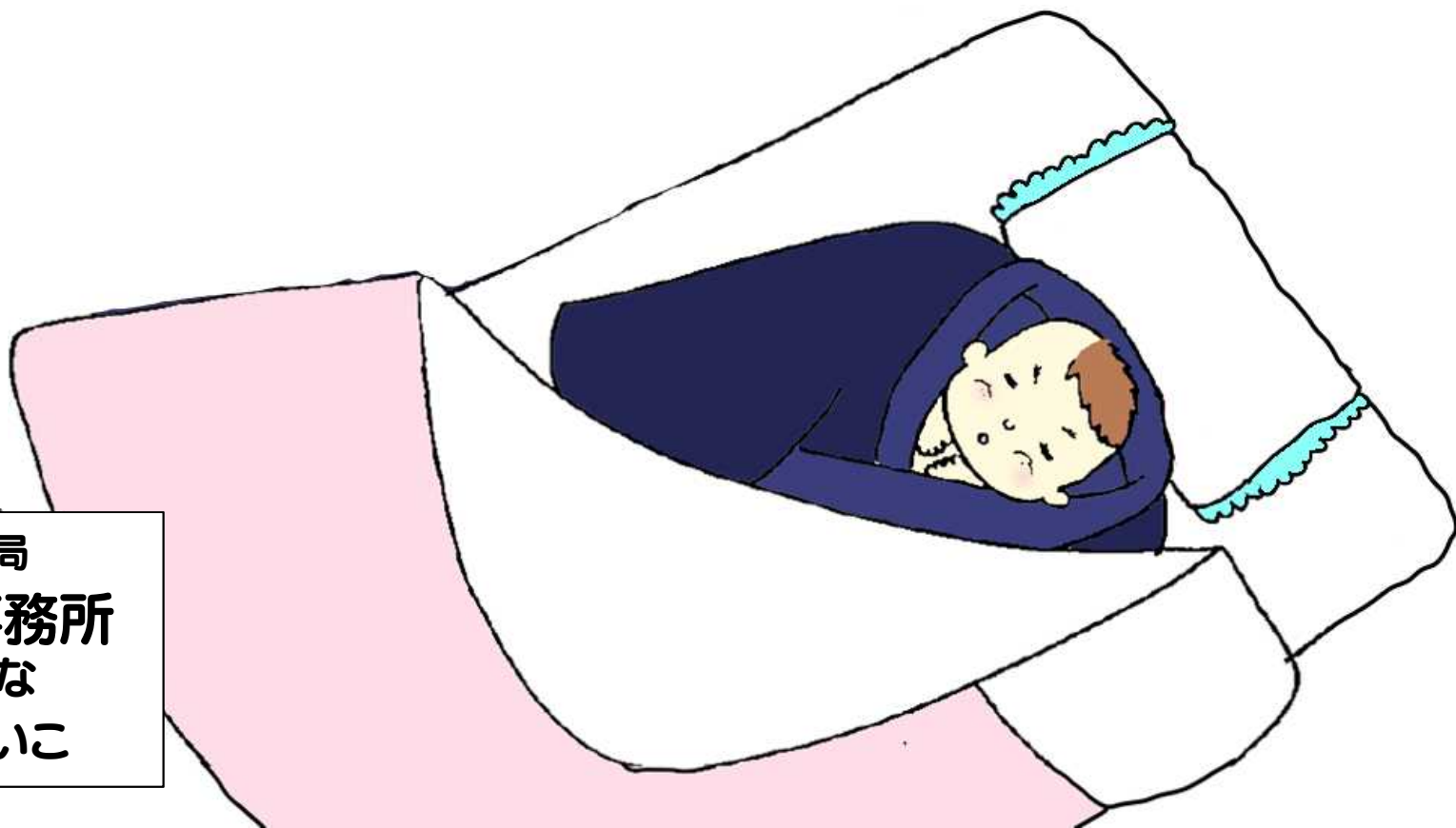


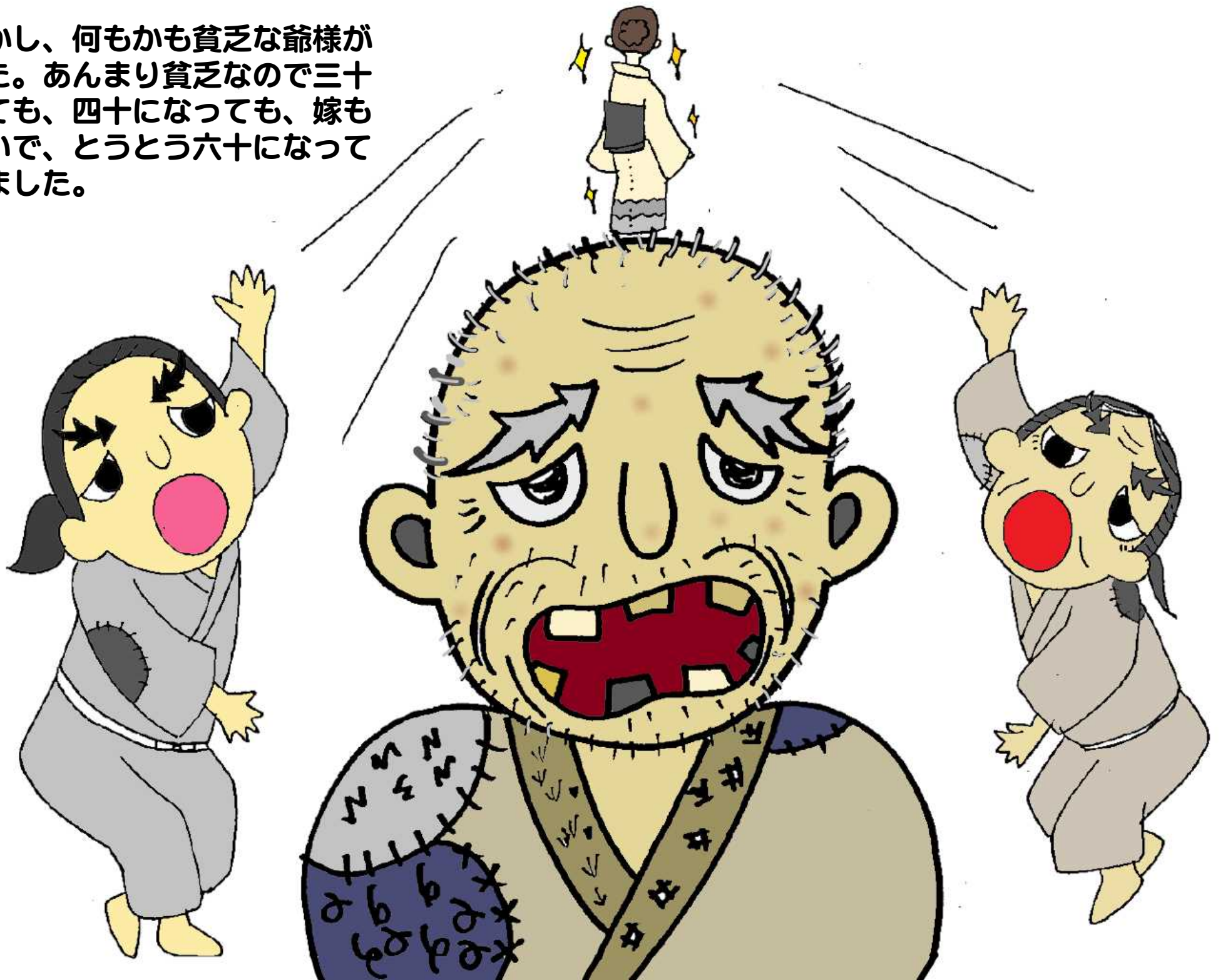
つがるの昔っこ (昔話) 15

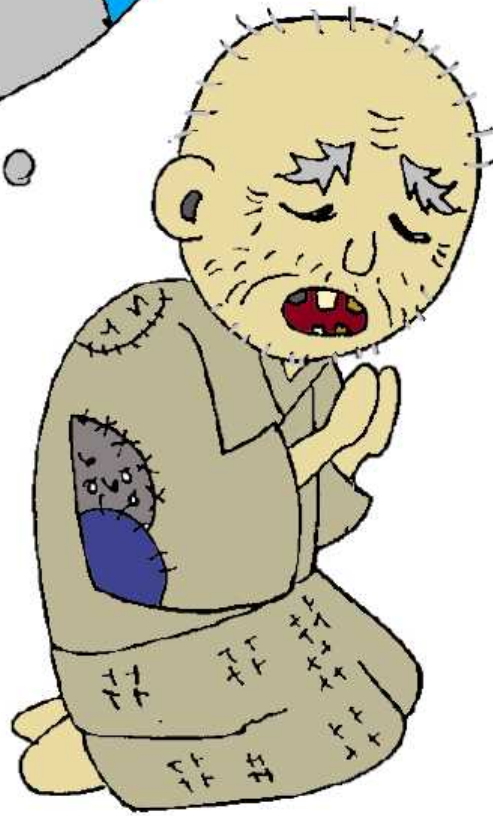
赤ん坊になった 爺さま (標準語)



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：つしま けいこ

昔むかし、何もかも貧乏な爺様が居ました。あんまり貧乏なので三十になっても、四十になっても、嫁も貰わないで、とうとう六十になってしまいました。





『俺、どうしてこんなに貧乏に生まれたのだろう。何も倖せなことも無く、歳をとってしまった。このまま死ぬのは馬鹿臭くさくていけない。ああ、もう一度若くなって、倖せな思いしてみたいもんだ』と思って、観音様に拝みに行きました。

『観音様、観音様。死ぬ前に、1回でもいいから、倖せな思いにさせてください』と、毎日毎日通って、一生懸命拝みました。

ある日の事、爺様が又、観音様にお参りに行ったところ、そのお寺の前に立派な身なりをした商人の若旦那が居て、一生懸命拝んでいました。爺様が『若旦那、若旦那、あなたは何を頼んでいるのか?』と、聞いたら、若旦那は『私は、町の呉服屋ですが、商いが繁盛して店も大きくなりましたが、後継ぎできる子供が居ないのです。何とか子供を授かって下さいって、お祈りしてるところです。』

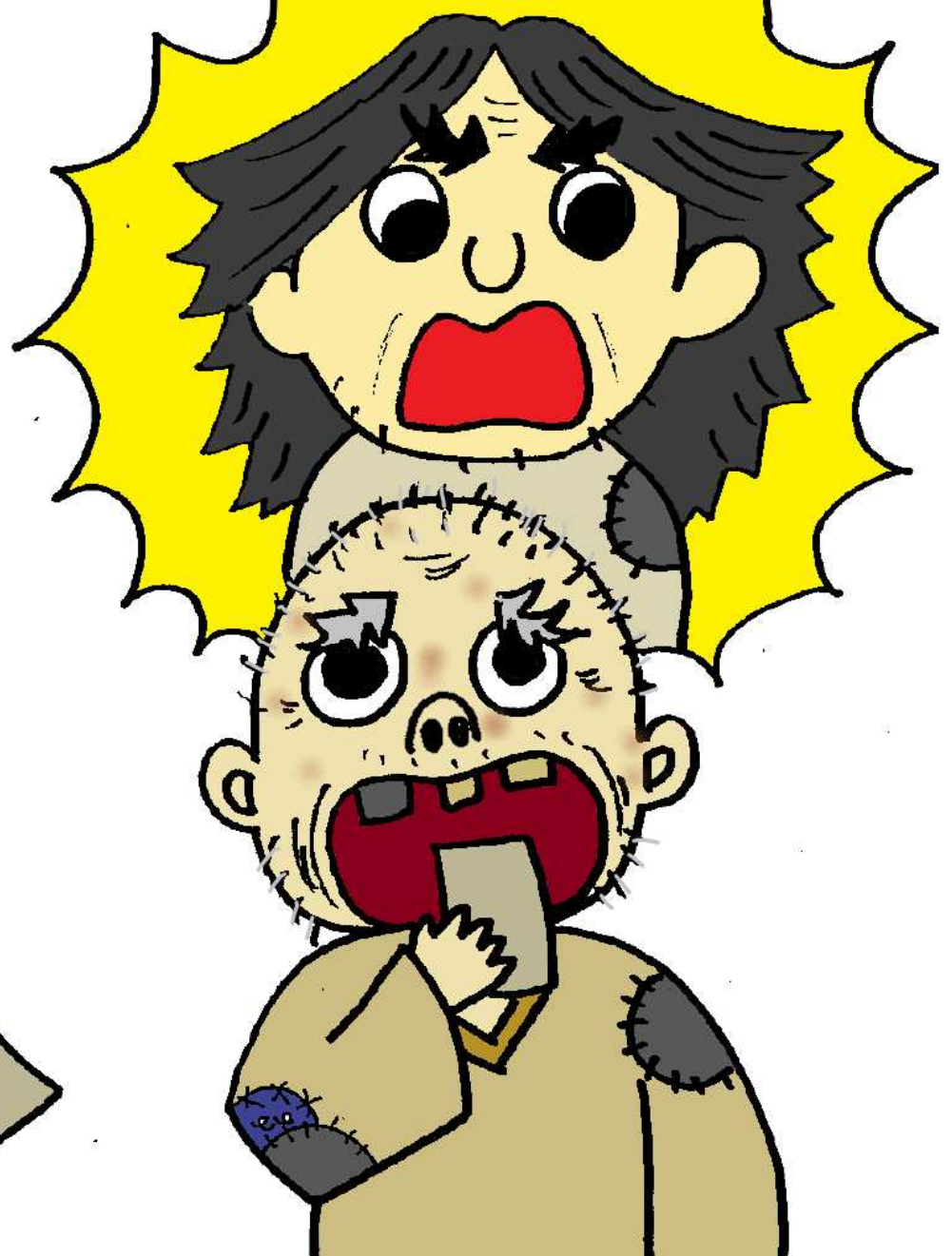
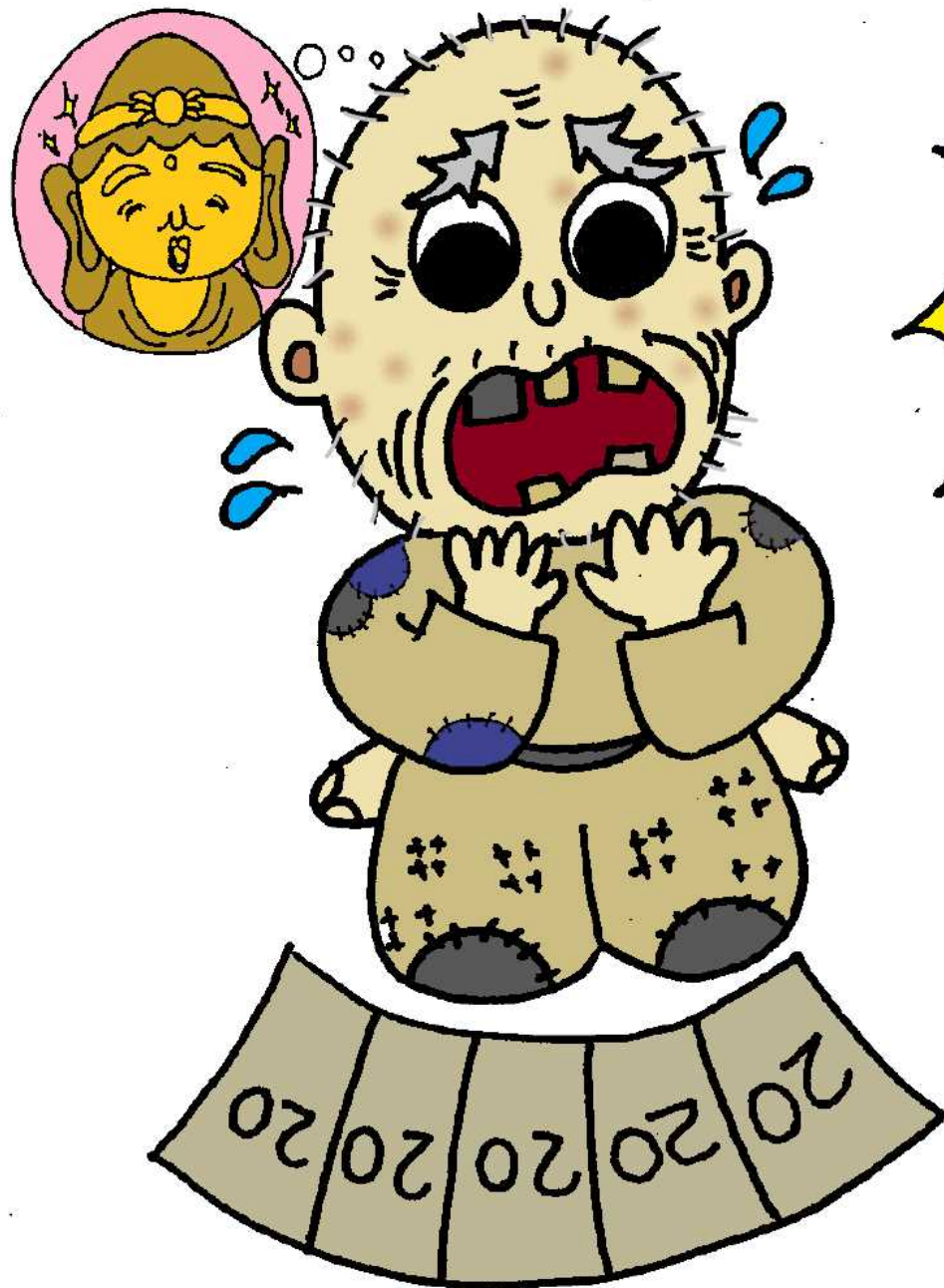


『そうですか、私も願掛けしてる事があって、毎日、ここに来て拝んでいます。それなら、これから、あなたの分も一緒に拝んであげますよ』と言ったら、若旦那は喜んで、『爺様、爺様、今度、町に来たら、必ず私の家に寄って下さい』と、待たせていた馬に乗って戻って行きました。



三七、二十一日の満願の日、爺様は今まで以上に熱心に拝んでいたら、奥の方から何だか神々しい声がして来ました。

そうしたら、その声に主が『ここに、有り難い護符が5枚あるので、これをお前に授ける。この護符を一枚飲めば、二十年づつ若くなるから、若くなったら、一生懸命働け、そうすれば金持ちになるであろう』と言いました。



見たら爺様の前に護符が5枚ありました。（護符というのはお守りのお札のことです）
爺様は早く若くなりたくて、なりたくて、1枚の護符をベロツと飲み込みました。すると、不思議、
ふしぎ、おでこの皺がスーッと消えて、白いぱやぱやな髪の毛も見る見る黒くなり、ふさふさになり
ました。

爺様はびっくり、喜んで、もっと若くなりたいと思って、ウツと、もう1枚飲み込みました。そうしたら、体に力がモリモリと出てきて、あっちこっち抜けた欠けた櫛のようになっていた歯もソロバンの玉のようにズラーツと揃い、二十歳くらいの若者になりました。



さあ、爺様は嬉しくて、嬉しくて、とんで村に戻ってきて、片っ端から村の人に声をかけました。『おーい、太兵衛。おーい、権助』と呼ばれてみても、誰もがおかしい顔をして、返事もしません。爺様は片っ端から村の人をつかまえて話しかけましたが、皆、気味悪いと逃げていきます。

そこで爺様は、『そうだ、町の呉服屋の若旦那の所に行ってみよう』と、町に行きました。若旦那の呉服屋は蔵が七つも八つもある大きい店でした。この店で働かせてもらおうかと思って、入って行きましたが、あんまり着ているものが汚なかったので、手代も番頭も誰も相手にしてくれませんでした。

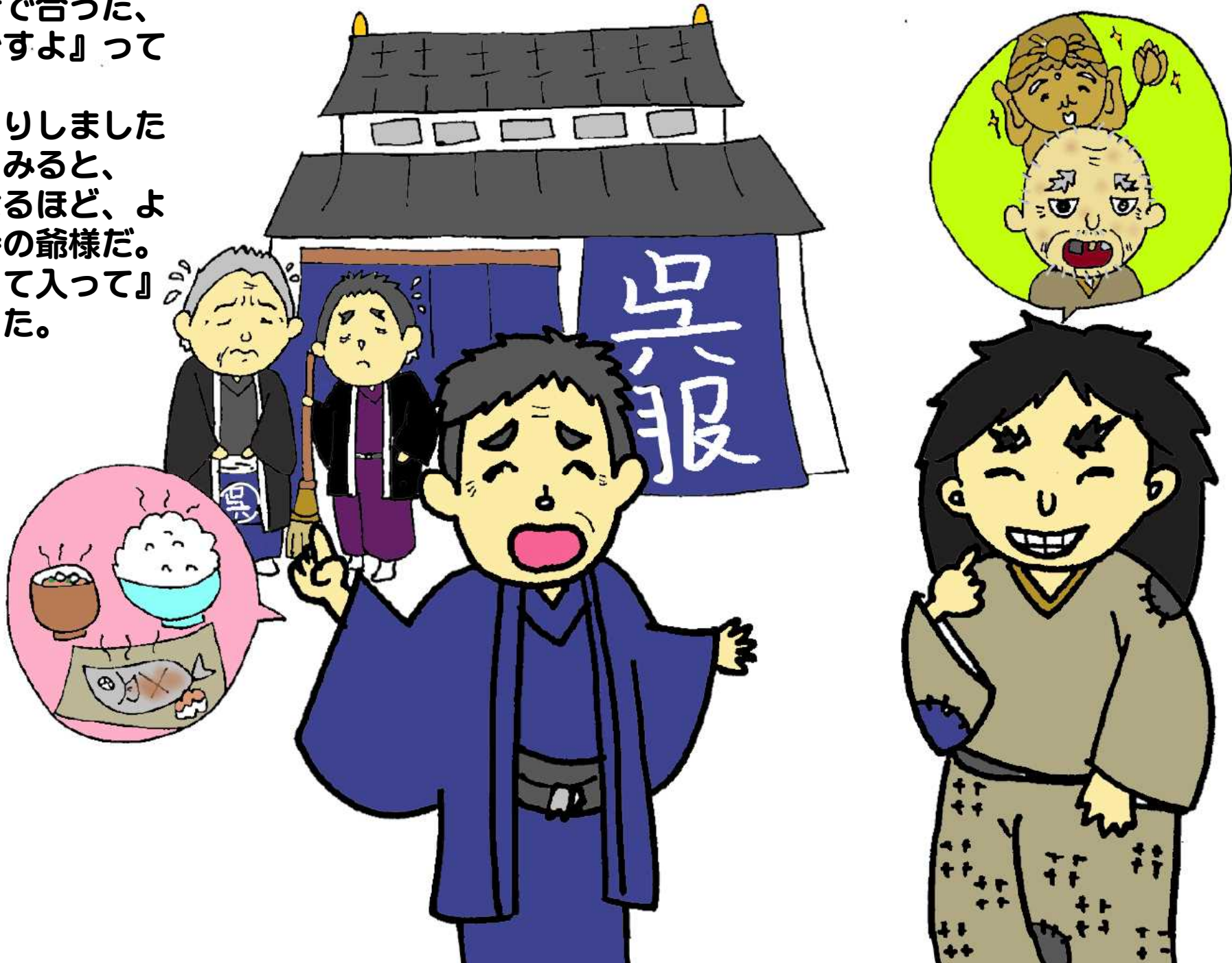


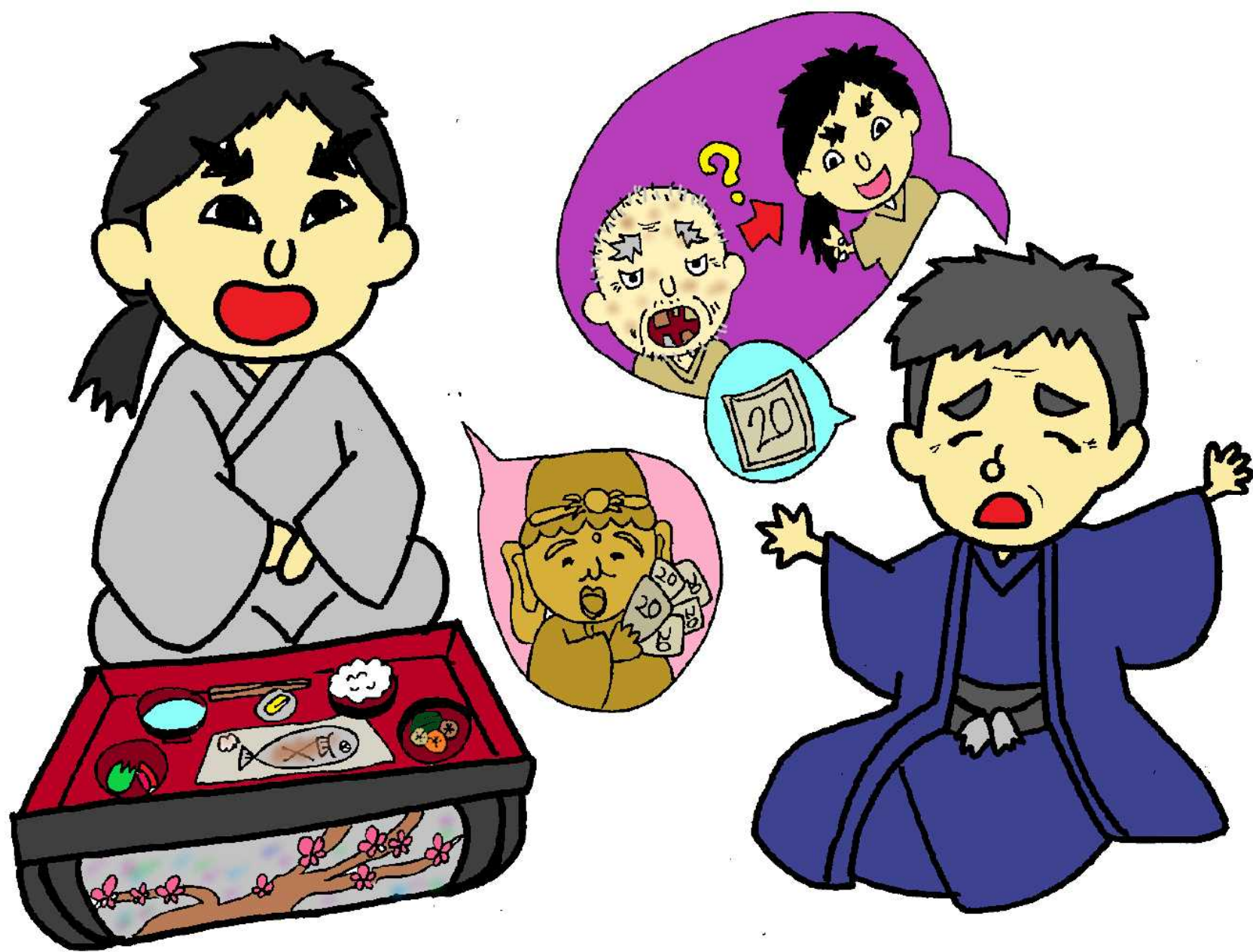
あーでもない、こーでもない、と騒いでいるところに丁度、あの時の若旦那が出てきました。

『あれー、若者でないかい。
俺は観音様の所で合った、
あの時の爺様ですよ』って
言いました。

若旦那はびっくりしましたが、
よく見てみると、

『あれあれ、なるほど、よく
見たらあの時の爺様だ。
ささ、まず入って入って』
と中に入れました。



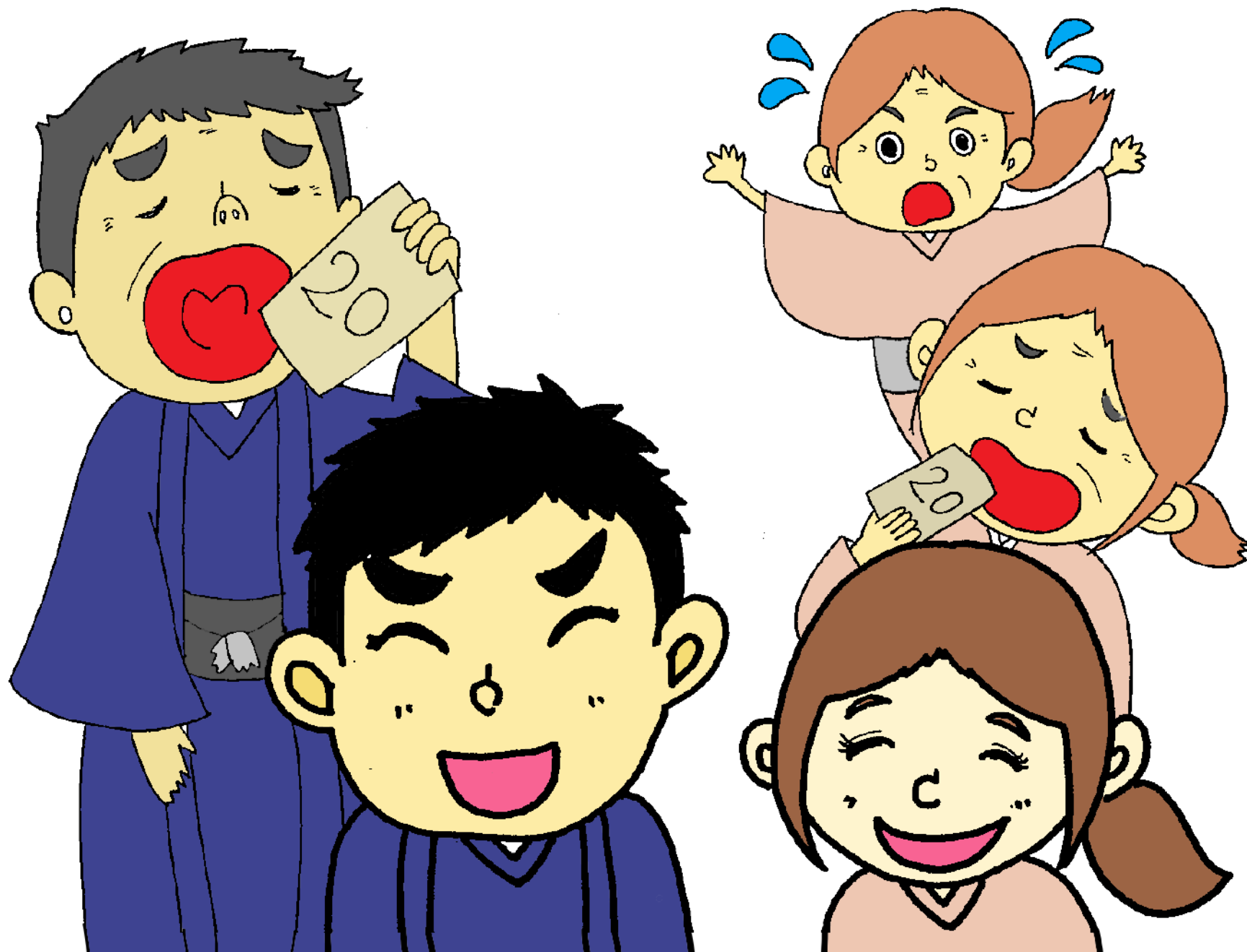


若旦那は爺様を風呂に入れて、さっぱりした着物に着替えさせ、奥の間でご馳走しました。そして、『爺様、爺様、どうして、そう若くなっただんですか?』と聞きました。

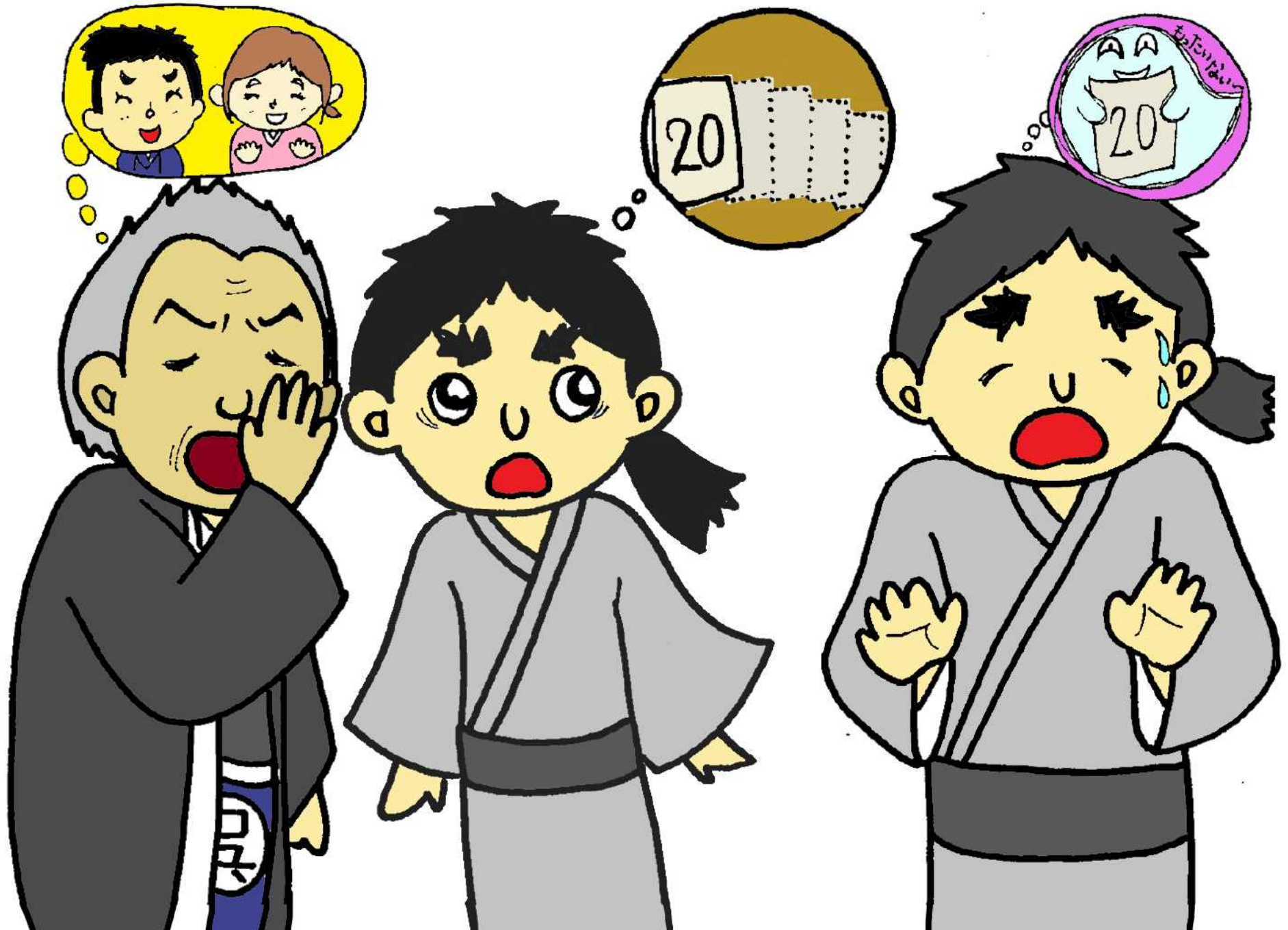
爺様は、観音様の護符の事を話して教えました。若旦那は目を丸くして話を聞いていましたが、『何とか、私にも、その護符一枚、分けてください』と頼みました。爺様はうんにご馳走になったし、お礼だと思って、若旦那に護符を一枚あげました。

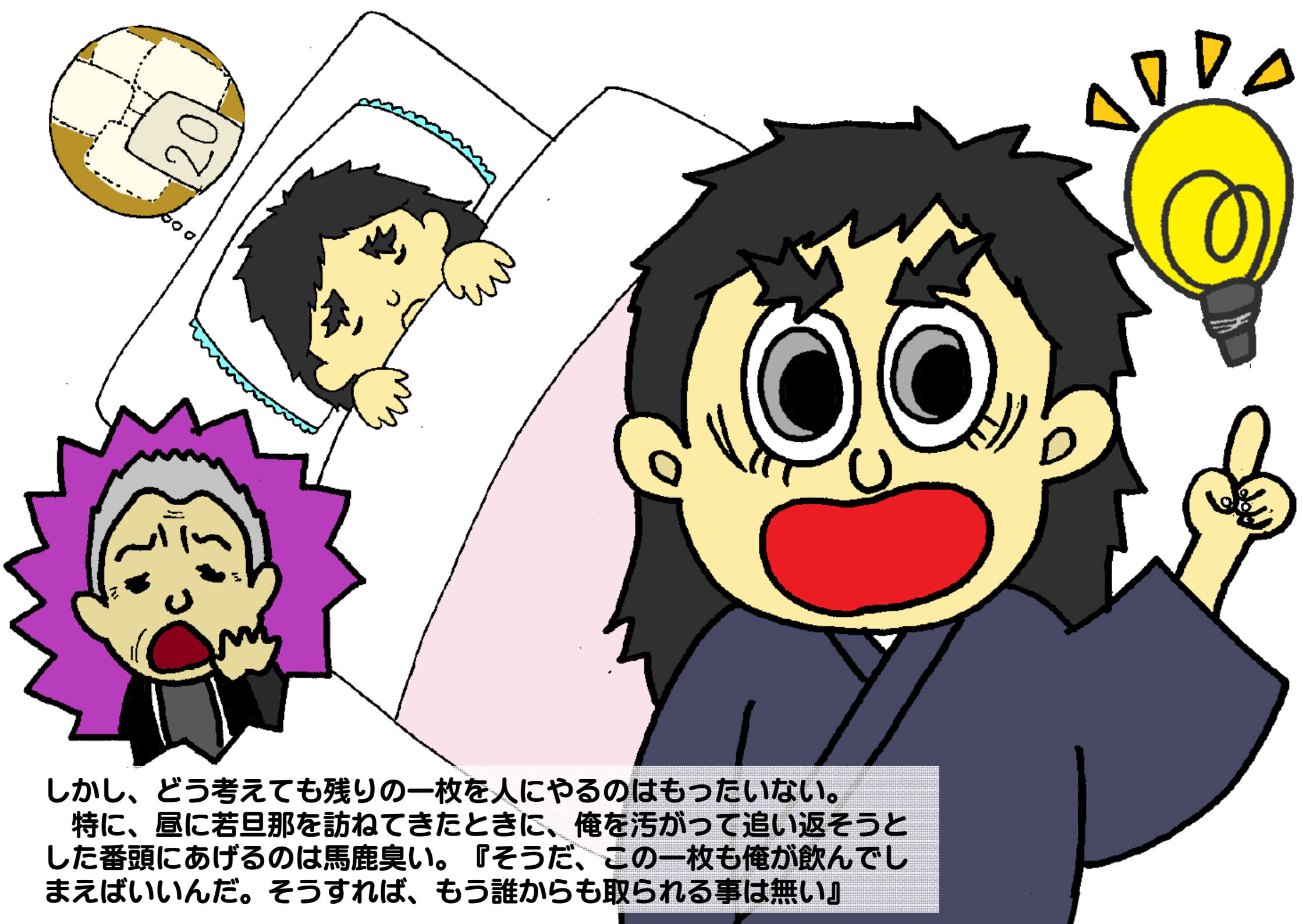
若旦那はその護符を飲み込んだら、すぐに二十五、六の若者になりました。それを見た若旦那の嫁はびっくりして、『爺様、爺様、家の若旦那こんなに若者になってしまい、これだと私があんまり年上になって釣り合わないの、私にも一枚ちょうだい』って頼みました。

爺様は、仕方なく、嫁にも一枚あげました。嫁も護符を飲んだら、たちまち十七、八の娘になりました。



それを見た番頭も『私にもわけてください、私にもわけてください』と言いましたが、護符はあと1枚しかありません。爺様は、番頭にあげるにはもったいないので、『明日まで考えさせてくれ』って断って、その晩は女中が用意してくれた、ふかふかの布団に入って、横になって考えました。



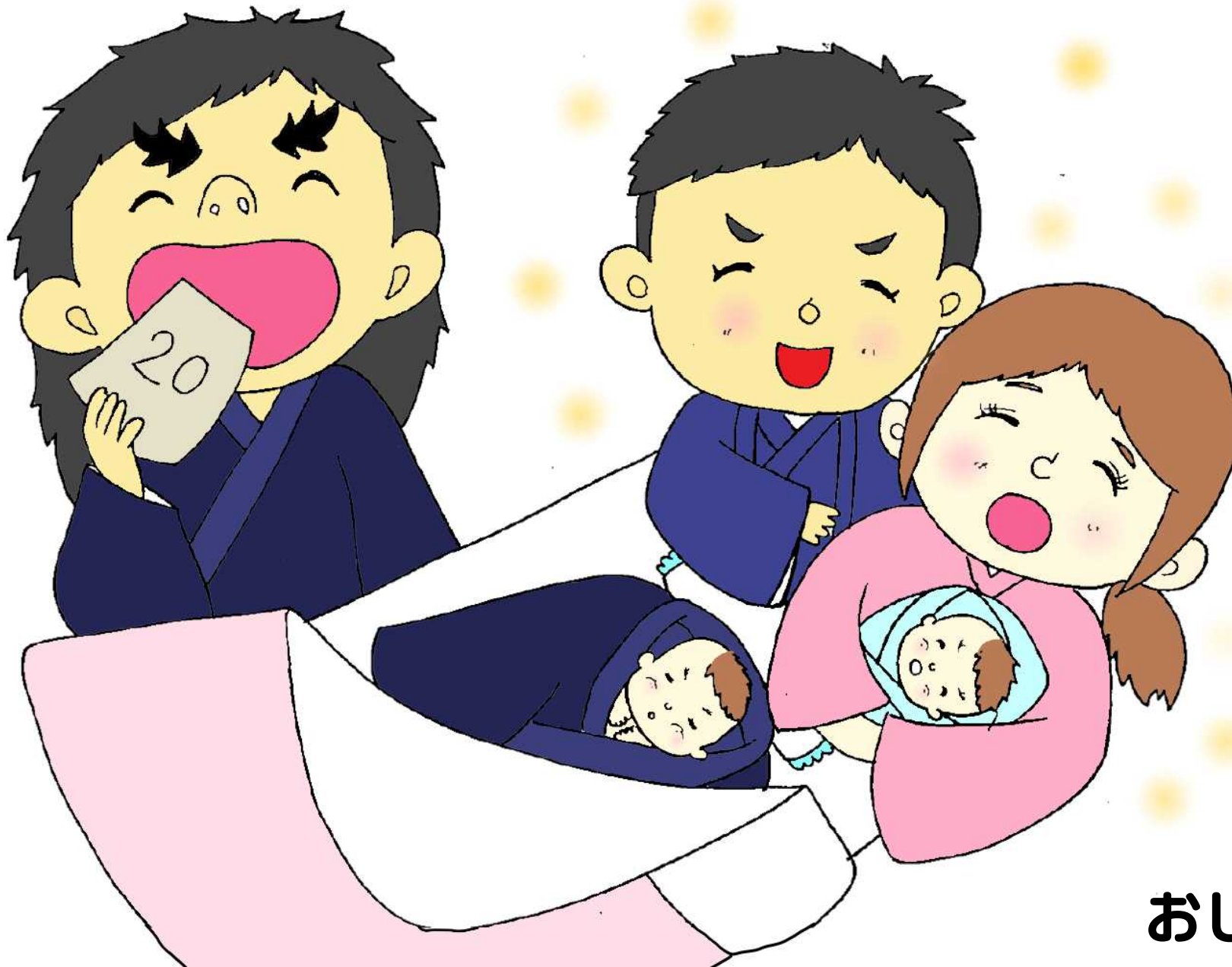


しかし、どう考えても残りの一枚を人にやるのはもったいない。

特に、昼に若旦那を訪ねてきたときに、俺を汚がって追い返そうとした番頭にあげるのは馬鹿臭い。『そうだ、この一枚も俺が飲んでしまえばいいんだ。そうすれば、もう誰からも取られる事は無い』

と、爺様は、最後の一枚の護符をベローっと飲み込みました。

次の朝、いくら待っても、爺様が起きてこないで、爺様の寝ている部屋に行ってみたら、爺様はどこにも居ません。なんと、寝床の中に、生まれたばかりの可愛い赤ちゃんが眠っていました。若者と若者の嫁は、『これは、きっと、観音様の授かりものだよ』って大喜びして、可愛がって、可愛がって赤ん坊を育てました。そうして、今度は赤子の爺様は倅せに暮らしました。



おしまい